

わが国の学校文化の位置と特性 — 庶民生活と国民文化をつなぐものとして ⁽¹⁾ —

菊入 三樹夫

Position and Characteristic of the Japanese School Culture - as the Intermediary between Common People's Life and National Culture -

Mikio Kikuri

1. はじめに一学校行事とその特異性

誰もが自己形成期である少年・少女時代を思うとき、学校体験と結びつけるのはある意味で当然のことである。しかし学校時代（小学校6年間、中学校3年間、およびに高等学校3年間）の何について思い出深く記憶しているかということになると、学校の主な日常、すなわち教室での授業時間やその内容ではないことも、往々に想像がつく。それは筆者自身がそうであるし、周辺の人達との会話を通してもそれは感じられることである。

筆者は授業「特別活動論」の遂行にあたって、これを履修している学生から簡単な統計をとっている。その結果はすぐに当の学生達にすぐに発表するのだが、予想通りというべきか、大多数の者の学校体験の記憶が、学校の主なる設立目的であるはずの、人格的・社会的な知識や技術の習得や訓練に置かれている者は、例外的といっても良いほど極めて少なかった。大多数の者は学校における「非日常」的なものに、これを置いていた<表-1>。

〔表1〕 学校意識アンケート（抜粋）

実施：1994.10.1

対象：大学2年生女子88名

【問】 高校生活で、最もよい印象として記憶している事柄を2つあげて下さい。

1.旅行（修学旅行、クラス旅行、遠足、海外研修など）	25
2.部活動・クラブ活動	24
3.学芸的活動（文化祭、学園祭、発表会など）	23
4.体育的活動（体育祭、球技大会、スキー教室など）	23
5.友達	11
6.授業・成績	11

その他、

クラス、私的旅行（友達との旅行）、コンサートが各5。

会話・放課後が4。異性の友達3。先生、通学、生徒会が各2。

合宿、ホームステイ、受験勉強、第一志望合格、女子クラス、バイク、実習、係、日常、卒業式がそれぞれかく1。（他に無回答あり）

【問】 高校生活の成果は何ですか。

- | | |
|--|----|
| 1.素晴らしい知人ができたこと（友人・先輩・先生） | 39 |
| 2.自分のやりたいことをやった、やりたいことが分かった。 | 14 |
| 3.努力した、一生懸命やった、自信がついた。 | 9 |
| 4.いろいろな人がいることが分かった、
人間関係の難しさが分かった。 | 8 |
| 5.勉強以外の大切なものを知った、できた、考えた。 | 8 |
| 6.つまらない3年間だった、無駄に過ごした。 | 3 |
| その他、
自分の性格が分かった、楽しかったが各2。
部活動、太ったが各1。
(他に無回答あり) | |

この非日常的な印象深いことがら、この多くは「学校行事」に属するのであるが、それにはすべてに共通する性格がある。学校における日常のフォーマルな人間関係、すなわち授業遂行を目的として形成される、学校の教育パラダイムとでも言うべき、教師と生徒達の間の指示・伝達と受容・理解の関係と、これを効果的なものにさせる生徒間の分担的關係が、多くは解体された状態になっていることである。そしてまさに、このフォーマルな秩序が解体しているところに、多くの者達の共感的な記憶が置かれているのである。それはクラス対抗の競技大会や修学旅行であり、放課後の部活動である。特に「合宿」を伴うものは記憶に深く刻まれていることも、特筆しておくべきであろう。

しかしこのような、日本の学校教育ではごく当たり前の学校行事も、たとえばわが国のような意味で理解された学校行事は、始業式などの儀式的行事も含めて、欧米など先進諸外国には原則として存在しない。わが国の中等学校で盛んな、生徒がある一つの団体に加入して登録される、いわゆる部活動なるものも存在しない⁽²⁾。ここでは学校教育の範囲は、あくまでも必要な知識や技術の習得が中心に置かれているのである。

また生徒が社会規範に忠実であり、人格までにおよぶ「躰」とも言い得る、学校におけるいわゆる「生徒指導」は、これもわが国の学校、とくに中等学校では熱心に行われるが、これも先進諸外国では原則的に学校教育の範疇外である。さらに、個々の生徒の人格形成にまで、手を差し伸べる（介入する）ことを主な任務とするような、いわば疑似的な親とでも表現しうる担任教師の制度を持たない国も多い。なお、学校が生活の場であれば、それを清浄に保つのがその成員の当然の義務でもあるが、かかる意味での掃除当番の制度は、これを持たない国のほうがはるかに多い。清掃は施設設置者側のなすべきことがらであると、理解されているからである。

このようなことがらについて、グローバルな地点まで焦点を引いて観察すれば、日本の学校教育のほうが、極めて特異なものであるとみることができよう。すなわち、日本の教育文化と、その中心にある学校文化は、極めて特異な性格を持っているのである。それは年間を通して行

われる学校行事にも端的に現れている。わが国の学校には、なぜ各種の学校行事が存在するのか、そして広く日本中で、それも同種の行事が、学校の文化として継承されてきたのだろうか。

これらのことがらを中心に考察すれば、日本の学校教育の底流に流れている、いわば民俗としての日本人の社会観、人間観が浮かび上がってこよう。また学校教育を通じて獲得される、私たちが文化的に共有しているもの、無意識の内に思考回路のなかに紛れ込んだ「イドラ」がはっきりとしたものになってこよう。このような視点から、この小論では、学校行事を多角的に考察しながら、わが国の学校文化の特性について、論を進めたいと考えるものである。

2. 学校行事の特徴

さて、先の〈表-1〉にあらわれた項目の多くはいわゆる学校行事であり、学校における平常の教育活動とは趣を異にするものである。すなわち、教育課程の大部分をしめる各教科・科目では、一週の間に定められた単位時間の授業がなされ、それが1学年を通して繰り返されるものである。ところが、上記の学校行事はイベント性・祝祭性が色濃く、いわば学校における「特異日」でもある。ちなみに学校行事については、現行の学習指導要領の表記に従えば、儀式的行事、学芸的行事、健康安全・体育的行事、旅行（遠足）・集団宿泊の行事、勤労生産・奉仕的行事からなっており、教育課程のうち「特別活動」のうちに属するものである。そしてこれらの活動はいずれも、生活共同体的な特性が見られる、あるいはそのように遂行されている、ということで共通している。学校はいわば生活の場として理解されているのである。

学校において、かりにこのような学校行事が存在しなかったと仮定してみれば、学校がいかにも生活共同体的な特性をもっているかが、逆によく理解できるであろう。先の〈表-1〉を考慮すれば、個々人の学校時代の印象は、極めて弱い希薄なものになったに違いない。つまり、まさにこの点が、教育機関といっても予備校やカルチャーセンター、英会話教室や自動車教習所などと、学校を区別する重要な相違点なのである。

学校にたいしてこれらの教育機関は、すべて個人がそれぞれの動機で、個人の欲求や希望を満足させるために参加し、当初の目的が達成されたとき、あるいは達成されないことが自覚されたとき、個々人が離脱するオープンな性格が強く、それぞれの目的をもった成員の集合体であり、機能的集団の特性は著しく高いものがある。

しかるに学校は、もとよりその設立目的は極めてはっきりしており、個々の成員もそれは受容しているものの、現実には学校が期待されるのはそれには留まらず、日常的な人間関係的な体験、すなわち「仲間」意識の形成そのものであり、これが満足されないとき、人々は充実した学生時代を送れなかったとして不満を呈するのである。すなわち、学校社会とはそれに属すること、そこにあることそれ自体が目的となっている社会であり、ここがその他の教育機関と学校を隔てる大きな相違である。わが国においては、学校は決して単なる知識や技術を習得するという、狭義の勉強の場などでは決してない。

ところで、この学校にみられる生活共同体的な特質は、同時にいわゆるムラ構造＝村落共同体的特質でもあることを、指摘しておかねばなるまい。例えば、良きクラスとは、担任教師と生徒が精神的に緊密に結ばれているといった結束が重んじられ、そこに同化する近親性と相互扶助が重要な倫理として求められるのである。また生徒指導にあっても、文部省が示した生徒指導の5つの原則⁽³⁾とは裏腹に、通常には、個人はめだたないよう全体に同化し、集団の一員として「恥ずかしくない」行動や服装で臨み、集団規範に無条件に従属することを求められるのが、実践の場での現状であり、これはムラの構造における行動原理ときわめて類似性が高い。

ムラ構造ということで、学校行事をここで古典的な、ハレとケによる日常性の理解に従えば、平常の学習のケにたいする、学校行事はまさにハレの行事に他ならない。一例として、たとえば運動会を見てみれば、運動会とはいわば学校社会における、ハレの祭礼の役割をはたすものである。

運動会では、伝統的に綱引きや玉入れなど、運動学的に見て意味のない競技が多くとり行われる。しかし、運動会を学校社会の祭礼の役割をはたすもの、との理解に立てば、これらの競技はにわかに重要な意味を持つことになる。詳細については別の機会に譲るが、村落内の地区同士が綱を引き合うことで、農事の豊凶や漁獲の多寡を占う神事は、全国各地で今日も行われており、同時にこれが村落の成員の結束を強める作用をはたしている。

綱引きに限らず、集団に分かれて御輿や山車で競う神事は、紅白分けやクラス対抗による運動会と、その心性においてきわめて類似性が高い。また、運動会に仮装ゲームはつきものであるが、仮装したり泥にまみれたりの民俗行事は、これも全国的に分布している。運動会の当日、朝から花火が揚げられ、老若男女がムシロに弁当持参で集い、校門前には露店が出たという祭礼ならではの風景は、経済の高度成長期にまで全国各地で見られたものである。村落の祭礼が、住民の精神的な一体性を計るものであるとすれば、学校社会における運動会は、学校の成員の一体性を計る重要な「学校神事」なのである。

同様に修学旅行も、いわば学校社会の「御蔭参り」として、学校文化のなかに位置づけることができよう。修学旅行をはじめとした宿泊を伴う旅行は、学習指導要領においては、集団宿泊・旅行的行事（小学校では遠足・集団宿泊の行事とある）として「平素とは異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」と、その教育的意義がうたわれてはいる。しかし、参加する側の気分や体験した人達の記憶では、自然や文化、公衆道徳の望ましい体験という外的な世界との関わりよりも、集団内部の平素の秩序が崩れることにその意義を見いだしており、先述した「学校の教育パラダイム」の対極に位置する無礼講やムダ遣いを満喫することが、重要な部分を占めている。そうすることで参加者の日常性や、人間関係に由来する蓄積したストレスは解消され、また新たな日常へのエネルギーを補充すること

になるのである。そのためには、まさに「集団宿泊」であることが不可欠である。このような村落的年中行事をちりばめて、学校の一年間のスケジュールが消化されていくのである。

また、どこの学校にもいわゆる七不思議や怪談なるものが継承されている。いわゆる公共機関でこのようなものが存在するのは、学校と病院・療養所くらいであり、これはたとえば、郵便局や税務署には決してみられない。いずれも生活の場という理解の上に立てば納得できるものである。怪談や肝試しが、村落社会における若者の通過儀礼の役割をはたしていることも、見落としてはなるまい。

この学校行事の消化を核にして「学校生活」が形成され、これを通して学校を自分のものとして、(通常、ウチの学校とかウチの会社というふうに表現する、そのウチとして)自己同一化していくのである。

この生活共同体としての学校理解と、そこでの体験によって獲得される身内意識＝共通感覚が、同窓意識に他ならない。この共通感覚がヨソ・ソトにたいするウチの感覚であり、ある場合には利益をウチのみで分けあうような、閉鎖的な学閥や郷党意識として、長く精神の中に保持されることになる。ちなみに、それが顕著に現れている例が、国民的な関心を集める甲子園の全国高等学校野球大会であろう。欧米諸国では一般に同窓意識は希薄だが、前述したように生活共同体的な学校理解も希薄である。むしろ学校は公共機関として理解されているとの印象を受ける。

学校の一年間のスケジュールに散りばめられた非日常的な学校行事は、わが国の学校教育に特異に存在するものであり、いわば国民的な理解・容認を得たものでもある。またそれを期待し、いつまでも記憶に深くとどめて置く、私たち国民も、学校社会および学校教育を、このように理解しているからであることを指摘しておきたい。(このように理解される学校教育の体験・陶冶が、どのような特性を有する人格の形成に資するかについては、別に論ずる。)

3. 学校行事の成立—生活文化から国民文化へ—

江戸幕藩体制の崩壊は分権的封建支配を終焉させた。明治政府の成立(1868)は、強力な中央政府が、日本列島におけるすべての事象を一元的に統治するシステムを、作り上げることであった。廃藩置県(1871)や地租改正(1873)といった重要施策をはじめとして、政府は反政府勢力を葬りながら、中央集権システムの成立を急いだ。

封建領主による身分支配のもとで、長らく地域に生活してきた人々に、「日本人」としての意識を定着させることは、明治政府にとってはきわめて重要な政策であった。近代における権威主義国家として、中央政府の意思が日本列島の津々浦々に散在する人々に、滞りなく伝達されるシステムが機能するためには、底辺を担う人々が、あらゆる相違を越えた共通意識、すなわち「日本人・日本民族」という意識(ナショナリズム)を持つことがきわめて重要なことである。

このために政府は、教育をその管理下におくことが必要であった。身分別や地域別の教育システムから、一元的な学校制度を確立することは、政府にとって最重要施策の一つである。それゆえ日本の学校は、成立した新国家のイデオロギーを、末端の国民一人ひとりに浸透させる役割を、当初から強く担うことになったのである。文部省の創設(1871)と、学区によって区分する機能的管理を明示した学制(1872)以来の、一連の学校教育にかんする法令⁽⁴⁾は、幾多の改変を経たが、1890～1900の間に、国民すべてに教育が義務づけられたことは、単に日本から「自今以後一般の人士（華士族農工商及婦女子）必ず邑に不学の戸をなく家に不学の人なからし」⁽⁵⁾めたことに留まらず、国民を天皇の政府を頂点にした日本帝国の権力ヒエラルキーの末端に臣民として位置づけ⁽⁶⁾、国家統治のネットワークを全国津々浦々に張りめぐらせるシステムが、完成したことを意味している。

しかし、不学の戸・不学の人をなからしめるとは、たんに国民皆学をうたったものではない。村落など地域や、私的に従来行われてきた教育を、「学」とは認めないことであり、学および知とは、国家によってオーソライズされ、学校を媒介として国民に与えられるもののみを、指していることははっきりしている。学校知の内容を国家が取捨選択して、国民に指し示すという方式は、遠く今日の学習指導要領の方式にも、受け継がれているものである。「知の国家管理」の第一歩が学制だったのである。いずれにせよ、村落など、地域の保持していた自律性や教育力が奪われ、地域住民の中心的教育力は、国家が背後にひかえた学校が、それに代わったことを指している⁽⁷⁾。（この作業が完了するのは大正年代であると、筆者は理解している。）

尋常小学校が地域に設立されると、従来の村役人や名主などの名望家的な地域のリーダーとは異なり、校長を先頭に訓導にいたるまでが、天皇の官吏として村民に対待することになった。学校では日の丸の掲揚や教育勅語の奉読が、学校行事として学年の節目節目に行われるようになり、子ども・住民に、国家というものを感覚的に実感できる距離に近づけることになる。学校は、狭い土地・地域に密着した地域共同体の成員から、日本国の臣民としての意識形成においてに役だつこととなった。学校制度を抜きにして、日清戦争(1894)・日露戦争(1904)の成功は考えることはできない。

自給自足的な村落共同体がもつ自立性、すなわち自律・自治意識（これはすでに地下検断などで近世期に成立していた。若衆宿や寄合いの制もその一つの現れであろう。）を解体・払拭して、村落を国家統治の末端に繰り入れる、そのための権力の末端の役割を担ったのが学校であることは、村落における校長の地位、生徒にたいする教師の権威主義的な対応などからも、充分に理解できる⁽⁸⁾。

その結果、村落人としてのマナー・儀礼・共同作業など、村落における生活や労働、交際などに必要な、生活規範や勤労理念を体験的に若者に教育する機関が村落から失われ、それによって代わるものとして、新たに学校がそれを担うことになる。（先述した運動会という「祭礼」では、日の丸の掲揚や行政職を来賓としてもてなすことなどにみられる、土着のクニツカミか

ら、ローカリティを超えたアマツカミへの祭礼対象の変化が見てとれる。)

ところで、学校教育が家庭教育の基本である躰や、こどもの服装にまでも介入する、これが日本の学校教育文化の一特徴でもあるが、一般的に学校のもつ教育力が、家庭教育力に優先するようになったのは、このような背景からである。拘束力の強い地域共同体に家庭が従属する伝統のなかで、地域共同体のもつ求心力を学校がそれに代わったのみで、家庭の位置は終始末端にあり、受動的であったからである。家庭教育力は学校の教育力に対抗するものとはならなかった。もともと家庭は村落に対抗する存在ではなかったからである。

このようにして、国家→学校→家庭という、今日にもみられる教育構成のヒエラルキーが、形作られていった。たんに国家権力による外的圧力によることのみでは、学校教育力に家庭が従順であることの説明としては十分ではない。家庭の側にも、これをすすんで受け入れる素地があったからである。今日にもみられる国民の学校教育への過度の依存と、家庭教育や地域などのプライベートな教育力の低下とそれへの低い評価は、学校を唯一の地域の開化・教化拠点としたことが主な要因である。また学校においては、学校の運営に必要な上からの組織作りは盛んであるが、生徒や保護者の自発的な組織作りは容易に認められないことも、同根の事情から発しているといえよう。

この点が、フランスにおいて近代国家形成の過程にあらわれた、中央集権化をめざす国家が、教会の影響力の排除して国民教育・義務教育の実施にさいして、これを生活への不当な介入として拒否する家庭という、対抗関係の一端を担う家庭と、わが国の場合の家庭との際だった相違である。地域や家庭の自立性の喪失と教育力の低下は、学校のプレゼンスの強化と一体の関係である。

権力の末端機構としての学校は、村落の自立性を奪うにさいして、村落が保持していた教育力や教育内容を村落から肩代わりし、担うことになった。そうすることによってのみ、学校は地域にたいする求心力を抵抗なく引き継ぎ、保持することができたのである。そうでなければ、学校は中央の権力を背景にする圧力機関として、住民の反発を受けて、地域の教育力の中心的地位を担うことはできなかったであろう。

こうして、日本独自の学校のイメージ、権威ある生活訓練の場、生活の場としての学校理解ができあがっていく。村落的な生活ルーティーンが持っていた年中行事と、そこでの若者の役割とその訓練、それらを通して村落との自己同一化といった、村落の若者にとっての村落の在りよう全般を取り込むことで、学校は村落に定着していったのである。

だから学校は、必然的に村落共同体生活型の特徴を備えるようになる。多くの学校行事や、クラスの一体感などの、親密で反面排除的な人間関係、厳粛と無礼講、清掃の習慣にいたるまで、これらはそれゆえ、欧米の学校社会には見られないのも当然と言えよう。

明治期以来の義務教育の普及は、このような特徴ある学校理解を定着させ、人は「母校」に気心の知れた暖かい共同体的な思い出を持って、それから利害に身を置く「欲望の体系」とし

での社会生活に入っていくのである。この有り様は戦前の進学率の極めて低い時代に、運良く高等学校や師範学校に進学できた若者達の場合により顕著である。

これらの施設は原則として全寮制であり、そこでは生徒による「自治」を大切にしていたことは、つとに知られたことである。これは通常、人格重視の原則に基づく、エリート養成のための訓育の現れであるかのように理解されている。しかしながら、この生徒達による学生寮の自治は、ライバル校との対抗試合での盛り上がりや、「ストーム」と称するような無礼講も同時に伴っていたのである。彼らの結合原理や一体感から考えれば、個々人が独立した人格として尊重され、それゆえ個人主義やプライバシーが尊重されて、契約的な人間関係を前提とした近代民主主義を成り立たせている人間観とは、大きく異なっている。

むしろここにみられる人間観は、近世以来の若衆宿や郷中などにみられる特性を、より多く受け継いでいる。戦前の旧制高校に見られた人格陶冶を、一つの理想的な教育像とする議論は今でも多い。しかしその内実は、進学が許された少数のエリート候補者の「教養主義」と、当時としては貴重なモラトリウムを享受できる、限られた若者のみの若衆宿的な共同発散体験であり、決して歴史をリードする発展的な方向に開かれたものではなかったのである。

1945年の敗戦によって大日本帝国の国体が崩壊して、アメリカ・タイプの教育制度が移入されても、わが国のこの学校理解は基本的に変化しなかった。村落共同体を維持し活性化する作用をなす年中行事と極めて類似した学校行事が、今日でも学校社会には受け継がれている。のみならず、かつては単に伝統的・習慣的に学校社会で継承されてきた、例えば修学旅行や運動会といった学校行事は、教育課程に組み込まれ、学習指導要領に明記されて、学校教育に不可欠のものとして、法制的にオーソライズされるにいたった。このことは、これら学校行事に不可分の村落共同体型の人間交通が、文部省によって学校社会におけるオーソドックスな人間交通として、オーソライズされることを意味しているのである⁽⁹⁾。

また今日の学校文化の一つとして、部活動などに顕著にみられる、生徒間の人間関係である同輩関係（ここではプライバシーを度外視した、緊密な「全人格的」な関係が価値をもつ）と先輩後輩関係（権威主義的な上下関係）のプロトタイプは、村落若者社会に求められ、前述の寮制度をもつ学校のなかで育まれたものであり、今日にいたっているのである。（旧軍隊の内務班にもっとも徹底した形で存在したが、これが旧日本軍の軍隊組織を機能させていたのである。）

4. 学校文化の影響力—作られる国民文化と相互作用

前述したように学校文化は、庶民の生活文化を取り入れることにより成立してきたが、その結果、近代学校制度が揺るぎない存在として確立すると、今度は学校から発信される教育文化が、庶民の生活文化に影響をあたえることになった。そしてそれが庶民生活にまで入り込み、それ以降の庶民の生活文化を作り変えて、庶民の心性の枠組みを改変することにもなった。

たとえば、『ふるさと』や『我は海の子』といった、今日でも愛唱される唱歌は、明治期の文部省による洋楽採用方針の賜物である。小学校における音楽教育は、当初より洋旋律の採用を基本方針としており、邦楽やその旋律は音楽教育の世界から放逐されて、サブカルチャーの地位へと転落していった。人間の基本的な表現形態として、長い歴史をもつ音楽という基層文化までも、文部省の方針がそれまで継続してきた邦楽・和旋律による日本独自の文化形態を断ち切り、日本人の芸術的・文化的表現形態を根底から一変させた典型的な実例である。

また、ドイツ民謡やスコットランド民謡のメロディーに適当な詞をつけ、文部省によって普及された多数の唱歌を、多くの日本人は日本のメロディーと思いこんでいるほど、今日では、通常の日本人は圧倒的に洋旋律の音楽に親炙している。これは明治期以降の文部省による唱歌教育の当然の帰結でもあり、国家権力が「文明」的な国民文化形成をもくろんで、学校文化を通じて庶民の生活文化に、大きな影響を与えた事例である。その他にも、今日では廃れてしまったが、祝祭日に日の丸を門柱に飾る習慣や、万歳の唱え方などの儀式的作法など、国民文化としての庶民の習慣や風俗の形成に、学校文化が重大な媒介の役割をはたすことになった例は多い。

第二次大戦後、学校教育は「民主化」されることになるが、戦後の庶民の生活文化の形成に、学校文化はやはり重要な役割をはたしている。学校給食（学校給食法の成立は1954年）が国民の味覚や食事の献立など、戦後の食文化に決定的な影響を与えたことは周知の事柄であろう（パン食の普及やカレーライスの日常化などは、その代表的な事例であろう）。それにとどまらず、学校給食は国民の栄養摂取にたいする関心や、衛生観念の飛躍的な向上、同食による一体感の形成、男子の食提供作業への参加など、多くの作用をもたらしたことも見逃してはならない。

また学校教育を通じて普及されたフォークダンスが、それ以降の若い男女の交際の方法やマナーに与えた影響もきわめて大きい。これは近代日本のユースカルチャーのターニングポイントといっても過言ではあるまい。同時に経済高度成長期以降の修学旅行に採用された旅行形態が、それ以降の日本庶民の旅行ブーム、とくに団体パック旅行の原型になっていることは多言を要すまい。

ところで、大学の大衆化が叫ばれて久しい。日本の経済力に支えられて入学してきた、無目的・無希望の学生は多い。いわば青年期モラトリアムの中としての大学である。しかし、大学の大衆化とするよりは、むしろ大学の学校化と表現した方が適切であろう。大学とは本来、個々人がその関心や目的に応じて関わる、きわめてゲゼルシャフト的な存在であり、その点が学校との重大な相違点であるはずなのだが、大学の学校化は、学生の人間関係の形成の特徴に、顕著に見ることができる。おしなべて学生たちの間では、サークルと称する小集団に集合することはかなり繁栄しており、それらは合宿を行うことを代表的行事として、むしろ群れることそれ自体を目的としている。サークル員は「学園祭」において、村祭のときに青年団がはたす

役割をそっくり演じることになる。

また、近年の「卒業旅行」なるものの一般化も同様な現象である。これらのことから浮かび上がる大学生の人間交通のタイプは、「最高学府」といった古典的な解釈による、大学における人間の関係とはかけ離れたものである。今日の同好会的な大学生の集団形成は、明らかに学校文化の延長である。かかる意味において、大学とはまさに青年の生活の場であり、それゆえまさしく学校社会として、大衆のものになっているわけである。

大学におけるのと同様に、本来のゲゼルシャフト、「欲望の体系」であるはずの企業社会も、わが国にあってはウチ・ソト関係からなり立つ村落共同体的な性格が顕著である。飲み喰いをともにしたり、慰安旅行を行うことなどで、親密な人間関係を保つことに多くのエネルギーを注ぎ込む。だが、子細はそればかりではなく、家族も巻き込んで開催される企業の運動会や、実業団スポーツ、企業内の合唱や絵画のクラブなどによって、執拗に人間関係の保持がなされている。企業社会は、村落共同体的な人間秩序によってつなぎ止められるという、日本の特異性が示されているが、その原型は学校社会であり、その訓練の場であることは多言を要すまい。

5. まとめ—個人・家庭・地域社会・国家そして学校

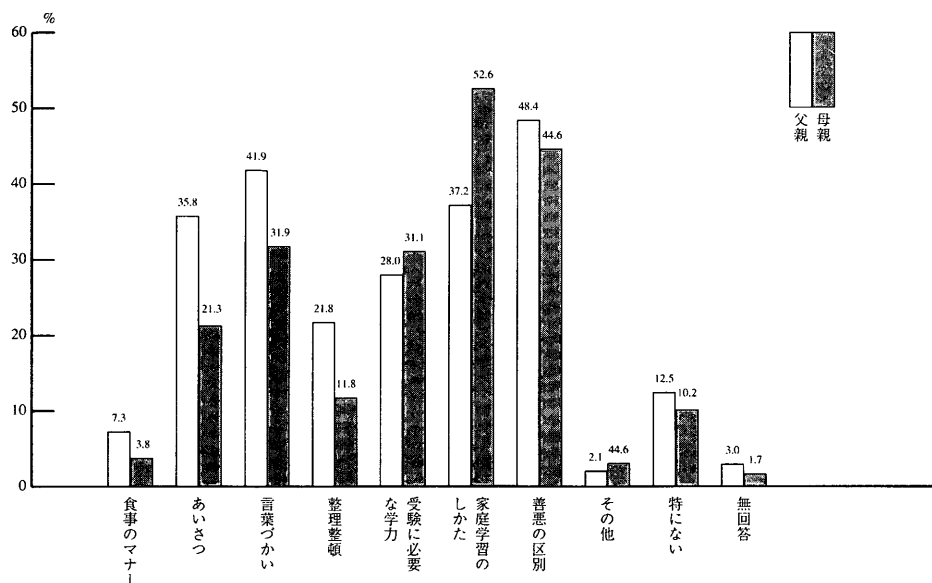
今日発生している学校教育にかかわる種々の問題において、学校が担うには過剰すぎる責任や期待が、学校に向けられている。その場合、往々に家庭や地域の在りようについては、省みられない。だが、問題解決に必要なことは、家庭や地域、そして学校が、何を分担して参加し、どうこの三者が協力できるかということにある。そのために必要なことは、学校のできごととできないこと、なすべきこととしてはならないことなど、学校存在の再考と共通理解がきわめて重要で、今日の教育問題の解決のための緊急の課題でもある。

経済同友会は、学校教育に多様な人々が参加して、家庭や地域が今日の学校教育にまかされたものを分担しあう（たとえば、クラブ活動や社会見学は地域教育に移管するなど）「合校」構想を発表して、「学校のスリム化」による学校教育の活性化を提唱している⁽¹⁰⁾。

しかしながら、一方では受験競争はいささかも衰える兆しは見せていない。少しでも世間的な評判の高い学校に入学し、後々の自分の社会的な地位の安定を目的とした受験競争は、学校を権力機構に連なるとする、学校を権威化させるもっともはっきりした学校観であり、このような学校観の標準化が、学校および学校教育をますます硬直したものにしているのである。

このような事情のもとで、今日の学校に期待されることは、本来の学校業務からはかなり逸脱したものとなっている<表-2>⁽¹¹⁾。ここでは家庭は、みずからその自立性を放棄して、基本的な価値にかんすることがらまでも、学校を前面に立てた体制に委ねようとしている。明治政府のとった、民をして寄らしむべき学校の政策がここについに結実したと言うべきであろうか。

＜表-2＞家庭ではなく、学校で教えてほしいと考えるもの。（複数回答）



（注）小学校4～6年生の子供を持つ親を対象。

資料：NHK放送文化研究所「小学生の生活と意識」（平成元年）

問題は、家庭そして地域の教育力をどう回復させるかであり、学校や地域がはたすべきことを再策定することである。そのためには、学校が現実社会の中でどのような役割をはたしているかを、冷静に分析、整理する必要がある。学校にたいする当為論や表面的な法制のみでの理解は、問題の本質を見誤ることになる。学校がはたしてきた歴史的な役割や、国民の心的な学校への関わりをも視野にいれて、これからの学校教育に期待すること、あるいは期待してはならないものを整理、構築していく必要がある。その際には、これに対応する個人像、家庭像、社会像も問われることになるのは当然である。

そのためには、私たち国民は学校に何を期待し、何を得てきたのか、どのようなものとして接してきたのかといった、有形無形の学校の現象や民俗的事象にまでも詳細に収集し、その特性と方向性を把握していく社会論的方法は有効性を保っている。私たち国民が持っている学校にたいする「共同幻想」のなかから、目を見開くことが重要だからである。

筆者が学校教育やそれに関する著作や作品に接してつねに感ずるのは、過剰なまでの情緒主義である。これは日本人が国民教育として、学校で体験してきたものとは決して無関係ではない。

戦後まもなく、あるべき「学園」の姿、あるべき教師と生徒の関係として、国民の圧倒的な支持を受け、戦後の教育文化のイメージに強い影響力を与えたものに、映画『青い山脈』⁽¹²⁾

と『二十四の瞳』⁽¹³⁾がある。『青い山脈』に始まる「学園ドラマ」は、精神的治外法権的なモラトリアムの場として、解放的であり、痛快ではあるが、一過性の気分高揚によって、人々を補償機制的なかにおいているだけである。同様に『二十四の瞳』では、主演教師の無制限の愛情からなる、疑似家族的な人間関係、これが見る人たちの感動と涙を誘った。だが、この内向きの共同体的な情緒主義では、都市へ年期奉公に出ることになった子どもにたいして、大石先生はいかにも無力であり、また戦争で視力を失った教え子には、万感迫るものがあったとしても、この戦争でこの子が戦うことになったアジアの若者の運命については、大石先生には思慮外のことなのである。いずれも共同体的、情緒的な原理による関係的な人間観の示す限界であろう。

他方、学校行事を日常の学習活動のなかに適度に散りばめて、年月を経ていくという学校観に、わが国における学習観・勤労観を垣間見ることができる。学校社会では、平常の目立たぬ努力や根気が大いに重要視される。才能にまかせて飛び抜けることを嫌い、一事にたいする専念と継続こそが称揚される。同時にこれは、個人が持つすばらしい才能や可能性をはぐくむよりは、それを恐れ個人を平均化する教育活動へと流れがちな傾向を持つということである。そしてこれに類する教育問題の実例は、しばしば見聞するところである。これは、今まで述べてきた学校観と底流において同一のものから成長してきた現象なのである。

かかる事例のみから考慮しても、学校文化の持つ我々にたいする呪縛力はきわめて大きいものであり、学校行事など具体的な行為の背後にはきわめて強固な枠組みが構築されているのを、私たちははっきり読みとることができるに相違ない。

注解

- (1) この小論では生活文化、学校文化、国民文化の語を多用するが、その場合、生活文化とは一般的に、地域共同体内でのいわゆる「常民」的な生活や、市井の庶民がもっている日常的な生活形態や習慣、またそれらについての感覚や観念を総体的に示すものとする。

学校文化とは、学校で授受される知識・技術に留まらず、その際に定型化される様式や形態と、そこで形成される拘束性をもった「隠れたカリキュラム」や規範、またフォーマル・インフォーマルの価値の段階性など、総体としての学校のあり方を指している。

国民文化とは、地域や階層などの限定性を越えて、広くネイションとしての共通性が意識された生活様式や感覚、観念などを広く指すことにするが、いずれも概ねこのような含意ということで使用する。

- (2) 米国では、地域の学校対抗のスポーツ・リーグが盛んであるが、チームへの加入はオープン・システムであり、わが国のいわゆる部、そこでは成員は人格的にほぼ完全に組織に

従属することになるが、これに相当するものは存在しない。

- (3) 『生徒指導の手引き（改訂版）』文部省、大蔵省印刷局、1981 P.1～7の第1章・1節「生徒指導の意義」に、

- 1.生徒指導は、個別のかつ発達的な教育を基礎と刷るものである。
- 2.生徒指導は、一人一人の生徒の人格の価値を尊重し、個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や行動を高めようとするものである。
- 3.生徒指導は、生徒の現在の生活に即しながら、具体的、実地的な活動として進められるべきである。
- 4.生徒指導は、すべての生徒を対象とするものである。
- 5.生徒指導は、統合的な活動である。

と明記されている。

- (4) 1879の教育令から、1880の改正教育令による行政の権限強化、また1886の諸学校令での中学校制度・高等女学校・実業学校専門学校の成立、1907の義務教育年限の延長と高等小学校・実業補習学校制度の成立、1920代の青年教育など、国民皆学政策による、村落における青年の自律的な組織の解体と学校教育への吸収、これら一連の法制が小学校の確立の上に成り立っている。

- (5) 学制序文〔学事奨励に関する被仰出書〕太政官布告214、1872 『史料日本の教育』神田修他編 学陽書房 1978 P.2

- (6) 代表的なものに、教育ニ関スル勅語 1890、国民精神作興ニ関スル詔書 1923、青少年学徒ニ賜ハリタル勅語 1939などに明確に表現されている。

1889年(明治22)には、市町村制が施行されている。これは、従前の農作業単位による小規模な村を合併し、新市町村を国家御製の末端に配置するねらいであった。全国一斉の強行で難行したが、政府は強行した。これで村落の自律性の剥奪は決定的になった。

- (7) 1889年（明治22）には、市町村制が施行されている。これは、従前の農作業単位による小規模な村を合併し、新市町村を国家制度の末端に配置するねらいがあった。全国一斉の強行で難行したが、政府は強行した。これで村落の自律性の剥奪は決定的になった。

- (8) 当初の小学校は、警察・戸籍管理・消防などの業務をもち、次第にこれを行政に移管していった。だが、衛生管理や身近な居住環境の管理は、学区単位の組織（近隣共同体）が強い力をもった。学区単位で自治連合会や体育振興会が催されている。『現代社会と教育 1 現代と人間』（大月書店 1993）「3都市空間と子ども」室崎生子 P244～247 参照。

- (9) 徐々にではあるが、変化の兆しはある。たとえば修学旅行も、旧来よりの名所旧跡の物見遊山的な旅行に反省がなされ、農村への体験学習や広島への巡礼の旅行、また外国の高校生との友好を強める旅など、多くの試みがなされており、これは修学旅行観の内容を代えることになり、期待や心構えなど生徒の心性も変化させることになろう。しかしなが

ら、集団宿泊をするという基本構造はいささかも変化がないし、学校の個性化や私学の経営上のメリットなど種々の事情から、集団宿泊という修学旅行の位置づけはむしろより強いものになっているようだ。

- (10) 『季刊教育法 103』特集: 経済同友会『学校から「合校」へ』提唱 P.3～39 エイデル研究所 1995
- (11) 『平成5年度版青少年白書』総務庁青少年対策本部編 1994 P.64
- (12) 原作: 石坂洋次郎、主演: 原節子・池部良、監督: 今井正、製作: 東宝 1949
- (13) 原作: 坪井栄、主演: 高峰秀子・田村高広、監督: 木下恵介、製作: 松竹大船 1954